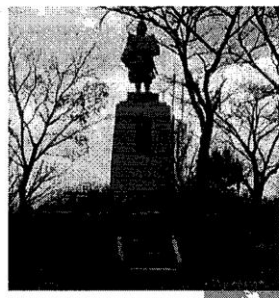


新語  
今昔物語  
第17話

大東ふるさとカルタに見る地域遺産⑥  
「要塞の山城に立つ  
正行公」

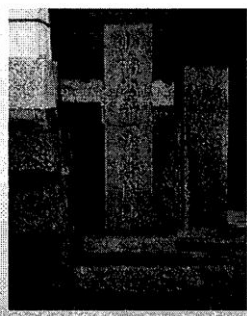


大東市の東部にそびえる飯盛山には、戦国時代に畿内を治めた三好長慶の居城であった飯盛城跡が残されており、その山頂部分の「高櫓郭」と呼ばれる場所に楠木正行の像が建立されています。飯盛山の西のふもと、大東市北条から四條畷市南野にかけての1帯は、南北朝時代の正平3(1348)年1月、南朝方の楠木正行と北朝方の高師直が、南北に縦断する東高野街道を主な舞台として戦った、四條繩手合戦の古戦場であったと考えられています。この銅像は、その合戦で討ち死にした正行をしのんで、昭和12年6月、小楠公会が中心となって建てたもので、元東京美術学校教授黒岩淡哉氏によって製作されたものです。



飯盛山頂に立つ楠木正行像

戦場であったこの地域には、楠木正行や四條繩手合戦に関連した事跡が多く残されており、大東市域ではこの銅像のほかにも、北条6丁目に楠木正行を祀ったとされる十念寺や、「ハラキリ・古戦田」という小字が残されています。また、四條畷市域では楠木正行やその家来であった和田賢秀のものと思われる墓があり、飯盛山の北のふもとには、正行とその家臣を祀った四條畷神社が明治23年に創建されています。(生涯学習課)



北条6丁目・十念寺前の碑

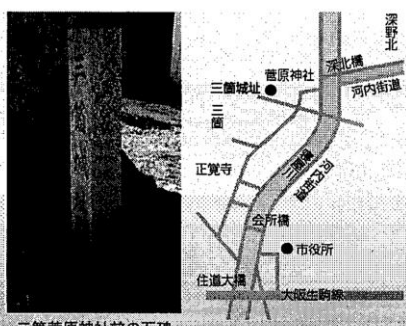
新語  
今昔物語  
第18話

大東ふるさとカルタに見る地域遺産⑦  
「キリシタン 歴史に残る  
三箇城」



三箇5丁目の菅原神社付近には中世において城があったとされており、神社前には大正8(1919)年に大阪府によって建立された「三箇城址」の碑が残されています。三箇城は、江戸時代に深野池と呼ばれるようになる大きな池の島の中にあり、東方に飯盛城や野崎城、西方には榎並城が控え、北河内の要衝の地に築城されていました。築城の時期は明らかではありませんが、当時の文献である「経算私要鈔」文明3(1471)年7月20日条に「遊佐五郎、河内三箇、云所二取陣在之(遊佐五郎、河内三箇という所に陣を取りてこれあり)」とあることから、これ以降、城としての機能が整っていたものと思われる。また、当時の城主についても明らかではありませんが、「大乗院寺社雑事記」明応2(1493)年2月の記録では、羽曳野市に築城されていた高屋城を本拠にしていた畠山基家の支城であったことがうかがわれ、河内国の守護であった畠山氏に関係した人物であったと考えられます。時代は流れ、永禄5(1562)年には畿内を治めた三好長慶の家臣であった三箇伯耆守頼照が城主になりました。その頼照は三好長慶が永禄3(1560)年に以降に居城としていた飯盛城で洗礼を受けたため、キリシタン武士となり「三箇サンチョ」と呼ばれるようになりました。三箇サンチョは、キリスト教の布教に非常に熱心であったことから、畿内におけるキリシタンの中心人物としてヨーロッパにまで名を馳せていました。(生涯学習課)

とされています。三箇城は、江戸時代に深野池と呼ばれるようになる大きな池の島の中にあり、東方に飯盛城や野崎城、西方には榎並城が控え、北河内の要衝の地に築城されていました。築城の時期は明らかではありませんが、当時の文献である「経算私要鈔」文明3(1471)年7月20日条に「遊佐五郎、河内三箇、云所二取陣在之(遊佐五郎、河内三箇という所に陣を取りてこれあり)」とあることから、これ以降、城としての機能が整っていたものと思われる。また、当時の城主についても明らかではありませんが、「大乗院寺社雑事記」明応2(1493)年2月の記録では、羽曳野市に築城されていた高屋城を本拠にしていた畠山基家の支城であったことがうかがわれ、河内国の守護であった畠山氏に関係した人物であったと



三箇菅原神社前の石碑